

『臨床ハンドテストの実際』書評1

# 家調協フォーラム

No. 255

全国家庭裁判所調査官研究協議会

## 「臨床ハンドテストの実際」

吉川真理，山上栄子，佐々木裕子 著

誠信書房 (3,300 円)

盛岡支部 横 山 勝

ハンドテストは、手の描かれたカードを見て、「手が何をしているところか」を被験者に求める投映法のテストである。一昨年、同じく誠信書房から、本書の3人の著者によって、『ハンドテスト・マニュアル』が翻訳された。わが国に、ハンドテストが紹介されたのが1970年ごろとされているので、実に30年余の月日を経て、ようやくハンドテストについての研究がまとめられた1冊の本が世に現れた。そして、本書は、それに続くわが国2冊目の本でもあり、また、日本人によるはじめてのハンドテストについてまとめられた本ということになる。そして、はじめての、とは書いたが、その内容は極めて高いレベルである。

本書は、いくつかの性格を兼ね備えた本となっている。第1には、前著翻訳の際、十分説明できなかった点を補足し、発展させているという実践的な性格。第2には、ハンドテストの背景となっている概念枠組についての研究的な性格。第3には、実際にハンドテストを利用して得られた事例を中心とする応用的な性格。そのようなところであろう。

例えば、第1の点では、ハンドテストを学ぶ上で、大きな障害となるスコアリングについて、前著を補足し、よりわかりやすくなっているし、さらに、日本人特有の反応を吟味してのスコアリングを論じている。

また、第2の点は、「手」の意味するところやハンドテストの結果、人のどのような側

面がわかってくるのか、という点における研究が論じられている。この点はおそらく今後もより一層深められていく分野であろう。

第3の点では、精神科臨床、学校臨床それぞれの事例が数ケース紹介されている。前著の事例のように、主にハンドテストを中心とした事例でなく、ロールシャッハや風景構成法とのバッテリーによる事例であるため、その意味でも、構造分析を追っていくのが楽しくなるところである。また、実際に、自分のケースに当たっていた時、疑問が生じれば、まずは前著と首っ引きで、チェックをすることになるが、それでも解決しなかった疑問が、これらのケースを追う中でわかってくるといこともありそうである。

私はこれまで何ケースかハンドテストを試みている。いきなりロールシャッハで、インクのしみを見せられて、ショックの大きい被験者に、現実へ引き戻す意味で、「遊び」の要素の加わったハンドテストの施行は意味があると思っている。そうした効果だけでなく、ハンドテストを加えることでわかることもたくさんある。しかし、まだまだ、どうスコアして良いか、その結果をどう考えて良いかに迷うことがあるが、本書の事例を学ぶことで、いくつか理解できそうに思われる仮説も生まれて来ている。

もっとも、本書の著者が何度も強調しているのは、ハンドテストは、施行が比較的楽であるのに、鑑別力があるものであるが、その

結果を安易に利用することの危険性だということである。ハンドテストは、必ずテストバッテリーが必要であるし、十分に構造分析をする必要がある。そのためには、まずは、各位が前著と本書を手にし、ハンドテスト用紙や本書が備えられ、皆で議論できれば、ハンドテストは、調査の重要な手法となりうると思われる。

